

## 編集後記

論文には「美しさ」が必要である。見た目の美しさ、言葉の美しさ、論の美しさである。この美しい論文の結晶が学問を形成し、科学として確立を促す。突き詰めていくと、美しさの積み重ねが哲学なのだといえよう。そもそも、人は美しいものに惹かれ、美しいものに希望を抱き、美しいものになろうとする。そう考えると、健全な社会と人の行動は、美しさによって結ばれるという一面も持つ。それゆえ、大学で「美しさ＝哲学」を教える意義があろう。

さて、経営学を学ぶ意義は、社会の縮図としての企業を研究対象とし、企業を通じて普遍的な人および価値観を明らかにするという使命にある。つまり、企業は社会を写す鏡なのであるから、あらゆる角度から企業を検討することに、科学としての経営学の役割が存在する。企業行動を通じた美しさを最高度に探究することにより、社会の健全な発展に寄与しようとするのである。

しかし、近年の企業行動を見ていると、人および企業の欲望によって、企業経営の美しさが失われているように感じる。連日報道される企業不祥事は、人々の生命と財産を脅かす事象が多く含まれている。このことが、今日の経営学の最大の課題である企業不祥事への対応を求められ、企業倫理の確立を急がせる理由となっている。理論の世界だけではなく、実践の世界でも美しさが求められていることを痛切に感じるのである。

今号にも多くの美しい玉稿をお寄せ頂いた。最も早く拝読する読者として嬉しく思う。このような研究成果が、社会の健全な発展に寄与することを確認しつつ、編集作業を終えようとしている。国際経営研究所には、50名を越える研究員が所属している。今後も、本紀要がより一層の研究発表の場となることを期待している。

今までは論文を書くことだけに集中してきた私であるが、編集作業を通じて様々なことを勉強させて頂いた。なかでも、国際経営研究所で美しさについて談義している時に、「見えない美しさ」という考えもしなかった概念を発見した。これは、興味深く、そして簡単には理解することのできない重い言葉である。この概念は、美しさを追求した研究・教育活動を目標とする私に、大きな転換を迫るかもしれない。

(『国際経営フォーラム』編集委員 小島大徳)